

高校生の進路態度についての一研究

藤巻かおり*・高木秀明**

A Study of Career Attitudes in High School Students

Kaori FUJIMAKI & Hideaki TAKAGI

Abstract

This study aims at investigating the status of career decision and the maturity of vocational career attitude with relation to the difference of the present circumstances of high school students, namely their high school lives and careers desired.

The following results were obtained:

- (1) As to the achievement status, the proportion of students who hoped to go on to professional school were larger than any other applicants.
- (2) As to the hope status which is optimistic about future and the moratorium status which postpones career decision, the proportion of students who hoped to go on to university were larger than any other applicants.
- (3) As to the defense status which decision process is unnatural and the indifference status which is unconcerned about future, the proportion of students who hoped to get employment were larger than any other applicants.
- (4) About the degree of maturity of vocational career attitude, the students who hoped to go on to university were lower than any other applicants.

目 的

高校生が進路決定をするということは、Eriksonのアイデンティティの達成とも関わる人格発達上、重要な問題である。ところが我が国では、進路指導は多くの場合、受験指導という形で行われており、進路決定のもつ選択的側面にのみ焦点が当てられている。そのためか最近の高校生には、発達過程で当然起こってくるはずの“自分とは何か”といった“自分”発見への欲求が見られない子供が増えているように思われる。

本研究では、高校3年生に対し、進路決定地位調査、進路成熟度尺度を実施し、その置かれた現状、つまり高校生活や高校卒業後の希望進路（以下『高卒後の希望進路』とする）

* 山梨中央児童相談所心理判定員 (Child Psychologist in Yamanashi Prefecture Central Child Guidance Center)

** 心理学教室 (Dept. of Psychology)

別に進路決定の在り方や職業的進路に対する考え方に違いが見られるかを調査することを目的とする。

調 査 1

方 法

・調査対象

山梨県内の高校3年生 495名(男子210名, 女子285名)

- ・進学校(大学進学を希望する者) 158名
- ・普通科高校(短期大学を希望する者) 118名
- ・技術系(商業, 工業, 農業)高校(専門学校を希望する者) 130名
- ・技術系(商業, 農業)高校(就職を希望する者) 89名

・調査期間

1995年10月～11月

・調査内容

下山(1983)が, 高校生の進路決定の在り方を調査するため, Marcia(1966)の自我同一性地位(Ego Identity Status)の職業領域の考え方とTiedeman(1961)の職業選択過程の段階(Vocational Decision-Making Process Stages)のモデルを参考として作成した, 進路決定地位調査を用いた。Table 1にその基準となる進路決定地位を示した。

・評定手続き

Table 1で示した進路決定地位の評定のためのテスト(進路決定地位調査)は, SCT・多肢選択・自由記述より成り立っており, 評定は, Fig. 1の手順で行うようになっている。

Table 1 進路決定地位

達成 Achievement	模索経験を通して, 自分の過去と現在を将来(=進路)に, 自然なかたちで統合し, 具体的進路を選びとり, その方向で, 自己実現の努力を始めている。
早期完了 Foreclosure	模索なしに, すんなりと具体的進路が決まっている。将来に対して現実的で肯定的展望をもち安定している。
防衛 Defense	不安の防衛のために, 自己の進路を限定し, それに強くindentifyしている。決定過程において硬さ, 不自然さを感じられる。
希望 Hope	将来に向かっての希望が決まったという状態で, 具体性が乏しい。将来に対し楽観的であるが, 現実吟味に欠ける。
模索 Exploration	将来に向かっての自己限定に, 真剣に取り組んでおり進路決定に関して(いくつかの選択肢の間で)前向きに模索している。
猶予 Moratorium	具体的に進路を決定するのは, まだ先のことと考えて決定を先にのぼしている。自己限定について, 切迫性はなく楽観的である。
危機 Crisis	進路決定をしようとするが, 決まらず混乱している。進路決定を前にして, 何かしらの不安をもって対処している。
無関心 Indifference	進路決定については, 無関心で自己の将来に対して現実的な展望がない。過去の統合ができていない。

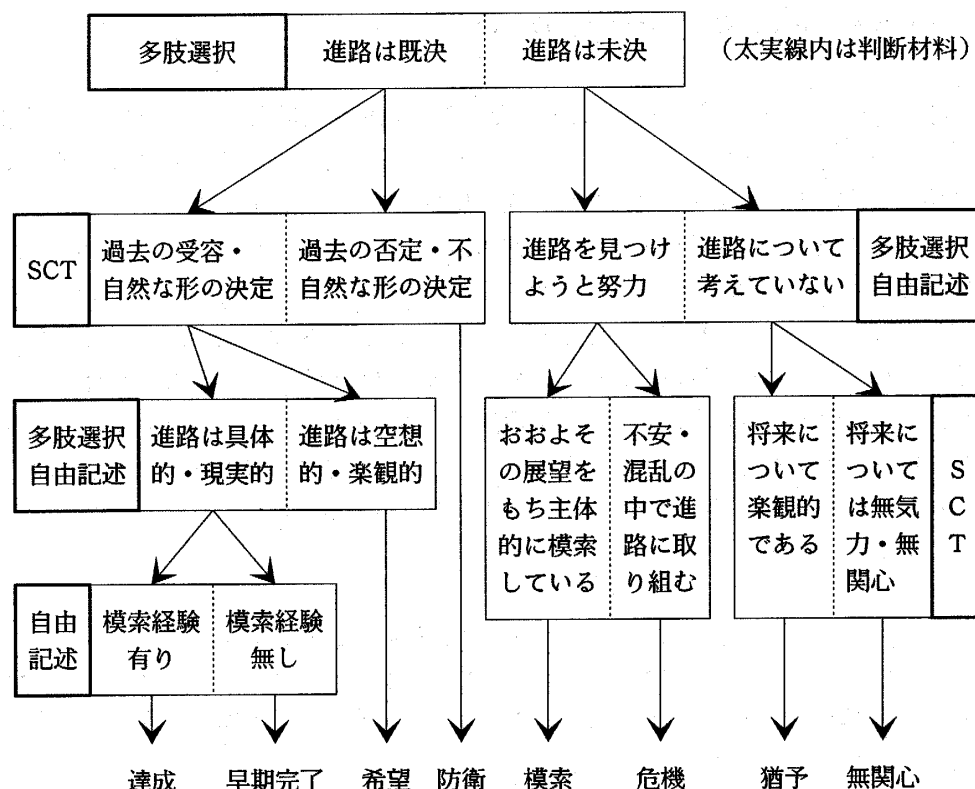


Fig. 1 進路決定地位調査の評定手続き

・調査実施の手続き

学級活動時間内に、学級担任が配布、回収した。

・信頼性について

進路決定地位調査では、SCT、自由記述を含んでいるため、調査の中から、100部を無作為抽出し、筆者ら以外の1名の大学院生マニュアルに従い評定してもらった。筆者らの評定との一致率は95%であり、ほぼ信頼性が確認された。なお不一致であった被験者については、さらに他の大学院生1名に評定してもらい、3者のうち2者が一致した評定を採用した。この結果を参考に、残りの被験者については筆者らがおこなった。

・分析対象

SCTおよび自由記述において、未回答で判別不可能の被験者、また普通科高校に在籍しており、短大以外を希望している被験者、同様に技術系高校に在籍しており専門学校、就職以外を希望している被験者をそれぞれ分析から除外した。その結果、分析対象者数は以下ようになった。

山梨県内の高校3年生 424名 (男子195名, 女子229名)

- ・進学校 (大学進学を希望する者) 158名
- ・普通科高校 (短期大学を希望する者) 74名
- ・技術系 (商業, 工業, 農業) 高校 (専門学校を希望する者) 110名

・技術系（商業，農業）高校（就職を希望する者）

82名

結 果

Table 2 において，高卒後の希望進路別の進路決定地位の度数と各高卒後の希望進路の中で，その地位がどの程度を占めているかをパーセントで示した。まず，結果を高卒後の希望進路別にみると，大学希望者では早期完了地位，希望地位，猶予地位に当てはまる者が多いことが目につき，3地位のみで約6割を占めていた。また他の希望者と比較した場合，危機地位に属する者が多いことが特徴的な結果である。短大希望者では，達成地位，早期完了地位の順に高く，専門学校希望者においても同様の結果が得られた。ただ専門学校希望者では，大学希望者や短大希望者に較べて模索地位の割合が低いことが目立っていた。また就職希望者においては，早期完了地位の占める割合が高く，他の希望者と較べても，この地位に属する者の割合は最も多かった。さらに就職希望者では，この他，他の希望者に較べ防衛地位や無関心地位が多く，逆に模索地位や猶予地位の占める割合が少ないのが特徴的な結果であった。

Table 2 高卒後の希望進路別の進路決定地位の度数およびパーセント

	達成	早・完	防衛	希望	模索	猶予	危機	無関心	計
大 学	19 12.03	35 22.15	6 3.80	33 20.89	17 10.76	32 20.25	14 8.86	2 1.27	158
短期大学	24 32.43	16 21.62	6 8.11	6 8.11	8 10.81	8 10.81	4 5.41	2 2.70	74
専門学校	48 43.64	30 27.27	6 5.45	14 12.73	4 3.64	6 5.45	2 1.82	0 0.00	110
就 職	19 23.17	23 28.05	12 14.63	14 17.07	4 4.88	3 3.66	0 0.00	7 8.54	82
計	110	104	30	67	33	49	20	11	424

上段は度数，下段はパーセントで横に足すと100%になる。

考 察

Table 2 からわかるように，高校3年生の進路決定状況をみると，既決・未決別では，311名の生徒が将来展望をもっていることがわかる。つまり，約7割の生徒が既に進路決定をおこなっている。さらに，模索経験を経て自己実現への努力をおこなっているものが，110名と全体の25.94%を占めている。特に専門学校を希望している生徒においては，各地位の中で，達成地位に含まれる者がもっとも多く，約半数近い生徒が，過去に進路を決定する際，何らかの理由で悩み迷った経験の後，幾つかの選択肢の中から今現在抱いている進路を決定したという結果がでてくる。これは以前，下山（1983）がおこなった結果とかなり異なっている。下山の研究では，106名の内，模索を経て決定した者は，わずか6名

(5.66%)しかいなかった。しかしこれは、下山が調査を実施した高校が普通科高校でその大半が大学進学を希望している生徒であったということが、結果に影響を及ぼしているのかもしれない。本研究の大学希望者では、達成地位が12.03%と他の希望者と比べて最も低くなっていることから、このことがうかがえる。

ところで、将来計画を立てなければならない作業が、一番目前にせまっているのではないと思われる就職を希望している生徒において、将来の職業を選択する際、あまり迷わなかったと答える早期完了地位の者が多かったのは意外な結果であった。考えられる一つの理由として、就職を希望している生徒、特に早期完了に当てはまる生徒の中には、家で商売を営んでいる家庭が何人かおり（早期完了地位23名のうち、15名）、そうした生徒が、小さいころより、家業を継ぐことにあまり疑問をもたず、両親が営んでいる仕事を肯定的にとらえているせいであるかもしれない。一方昨今の厳しい就職事情もあり、『なりたいたいものになれるとは限らない、職があるだけ恵まれている』といった現在の状況が、堅い不自然な進路決定をする防衛地位や『他にやりたいことがないから』という理由で職業を選択する無関心地位の占める割合が多いという結果に反映されているものと思われる。

4年制大学を希望する進学校の生徒で特徴的であったのは、他の希望者に比べ、まだ将来を限定せず、決定を先延ばしにしている猶予地位が多いことである。こうした地位の生徒の典型的な例は、『将来、こうなればいいなあと思っていること（夢でもよい）を自由に書いてください』という本研究における質問に対し、『第一志望大学に受ければよい』というように、近い将来のことで頭がいっぱいで、長期の人生設計まで考えられないといったものである。また『これから自分の将来はどうなっていくと思いますか』との質問に対する回答では、『どの大学のどの学部に行けるかで、将来の職業も変わってくる。そのためまだわからない』といった類いのものが多く『絶対にこれになりたい』というより、『なれるものになる』式の考え方が目立ち、現実的ではあるが夢の無さを感じる回答であった。やはり日ごろから、模試などにより、厳しい現実を目の当たりにしているせいであろうか。さらに大学希望者で特徴的であったのは、自分の将来についてどうしていいのかわからなくなってしまうと、不安の中でしゃがみこみ状態の危機にある生徒が、他の希望者に比べて多かったことである。これはなりたいたいものになるためには、まず大学受験を突破しなければならず、そのためには、ある一定以上の成績ラインをクリアしなければならないが、自分の成績ではとても無理かもしれないといったことが、進路決定の邪魔をして混乱に陥れている。また、もう時間がないのではないかという感じが強まることにより『焦り』や『不安感』も加わっているようである。このような点から考えると、やはり受験という課題が高校生の進路決定に及ぼす影響は大きく、受験のために内的な決定過程が全くゆがめられているとは言い切れないまでも、決定を遅らせたり、模索→決定の順序が逆になってしまったりと、とりあえず決定してはみた、という生徒を作り出していることは事実である。

調 査 2

方 法

- ・調査対象, 分析対象, 調査期間および調査実施の手続きについては調査1と同じ
- ・調査内容および評価手続き

高校生がどの程度, 職業的進路に対して成熟した考え方をもっているかを測定するため坂柳・竹内(1985)によって作成された進路成熟度尺度(CMAS-4)を使用した。本尺度は教育的進路成熟と職業的進路成熟の2側面から構成されているが, 本研究では目的上, 職業的進路成熟を測定する尺度のみを用いた。なお本尺度で測定される進路成熟には, ①自立性, ②計画性, ③関心性の3つの下位概念がある。これらは, Table 3の基準により設定されている。

Table 3 職業的進路成熟の下位概念および項目例

①自立性: 進路への取り組み姿勢が, 主体的であるか。 ex. 職業の選択や決定は自分から進んでする。
②計画性: 将来展望をもち, 自己の進路に対して, 計画的であるか。 ex. 志望職業に就くためには, 計画を立て準備することが大切である。
③関心性: 自己の進路に対して, 積極的な関心をもっているか。 ex. 最近, 将来の職業や就職のことが, とても気になっている。

評価手続きについては, 下位概念それぞれについて, 5組ずつ計15組の意見のそれぞれに0点から2点の3つの項目が用意されておりその3つの中から, もっとも自分に当てはまるとする項目を強制選択する。また, 下位概念の結果を加算したものを, 成熟度得点とする。Table 3は2点の項目例である。

結 果

まず成熟度について, 高卒後の希望進路(大学・短期大学・専門学校・就職)を要因として, 一要因分散分析をおこない, 有意であったものに関して多重比較をおこなったところ, 有意に大学希望者が専門学校, 就職, 短大の希望進路に比べ得点が低く, また専門学校希望者>短大・就職希望者, さらに短大希望者>就職希望者において有意差が認められた。

下位概念別にみると, 自立性については, 専門学校希望者が他の希望者と比較して, 有意に自立性得点が高かった。

計画性における結果では, 専門学校希望者や就職希望者が大学希望者と比較して有意に得点が高く, さらに有意に専門学校希望者>短大希望者という結果であった。

最後に関心性については, 就職希望者が他の全ての希望者と比較して, 有意に得点が低くまた有意に専門学校希望者>大学希望者という結果であった。

詳細についてはTable 4, Table 5に示す。

Table 4 高卒後の希望進路別の職業的進路成熟度得点

	n	自立性	計画性	関心性	成熟度
大 学	158	6.24	4.94	6.29	17.48
短期大学	74	6.93	6.51	6.98	20.40
専門学校	110	7.95	7.63	7.48	23.08
就 職	82	6.38	6.95	5.53	18.87
F 値 (df=3,420)		6.55**	6.75**	7.23**	9.23**

**p < .01

Table 5 職業的進路成熟度得点に5%水準で有意差が見られた高卒後の希望進路対

	大 学	短期大学	専門学校	就 職
大 学				
短期大学	M			
専門学校	M I P C	M I P		
就 職	M P C	M C	M I C	

M : 成熟度 I : 自立性 P : 計画性 C : 関心性

考 察

3つの下位概念および全体的成熟度において、おおよそ大学希望者の職業に対する態度が未成熟であるという結果が得られた。中でも将来の職業に対して、何らかの具体的な展望が問われる計画性については、特に低いことが目につく。このことは調査1の結果において、大学希望者が他の希望者に較べて、将来の進路決定を先延ばしにしている猶予地位に属する生徒が多く、逆に進路決定に際し、真剣に取り組んだことのある達成地位が少ないことから考えても妥当な結果と言えるだろう。

ところで青年期課題の一つである進路決定という作業は“自分”を意識するようになった証しであり、他者とは違う自分を社会ないし他者に認めてもらいたいという欲求がその根底に存在すると考えられる。しかし残念なことに最近こうした『～になりたい』という確固とした信念をもっている青年が少なくなっている。それはこのような自分探しをする時間を青年に与えないで、『早く決めないと遅れをとる』『悩んでいる暇があったら勉強したほうがいい』という学校や親など周囲の要望が強いからではないだろうか。本研究においてこのような影響を最も受けているのではないかと思われたのが、上記の結果からもわかるように、いわゆる進学校に通っている大学希望者であった。スチューデント・アパシー等の大学入学後の何らかの不適応問題が、即受験中心の教育体制に帰せられないまでも、

一つの要因にはなっているといえるのではないだろうか。

引用文献

- Marcia, J. E. 1966 Development and validation of ego identity status. *Journal of Personality and Social Psychology*, 3, 551-558.
- 坂柳恒夫・竹内登規夫 1985 進路成熟度尺度 (CMAS-4) の信頼性および妥当性の検討 愛知教育大学研究報告 (教育科学編), 35, 169-182.
- 下山晴彦 1983 高校生の人格発達状況と進路決定との関連性についての一研究 教育心理学研究, 31, 157-162
- Tiedeman, D. V. 1961 Decision and vocational development: A paradigm and its implications. *Personnel and Guidance Journal*, 40, 15-21.